

宮沢賢治の創作地名「イーハトヴ」の由来と 変化に関する地理学的考察

米地文夫*

(1995年10月16日受理)

はじめに

「イーハトヴ」が宮沢賢治の創作した架空地名であり、一般には彼のイメージの中の岩手県を示すものとして、よく知られている。その根拠は主として童話集『注文の多い料理店』の新刊案内のちらしに次のように書かれていることによっている。

イーハトヴは一つの地名である。しいて、その地点を求めらばそれは、大小クラウドたちの耕していた、野原や、少女アリスがたどった鏡の国と同じ世界の中、テパーンタール砂漠のはるかな北東、イヴン王国の遠い東と考えられる。

じつにこれは著者の心象中に、このような状景をもって実在したドリームランドとしての日本岩手県である。(句読点は原文のまま。傍点や傍丸などは略した。)

原子 朗編(1989)の『宮沢賢治語彙辞典』(東京書籍、以下本稿では『語彙辞典』と略す)においても「イーハトヴ」の項に「岩手県を指すことは間違いない」としている。この語の由来についても、旧仮名遣いの県名「岩手(いはて)」によるという説が定説となっている。この論文は、これらの定説に疑問をもち、由来や用例などについて地理学の視点から分析を行った。イーハトヴの由来については、他にも考え得る可能性があるという中間的結論に達し、新解釈の二三を提示する。用例の分析からは、イーハトヴは賢治のイメージの中では、岩手県という地域にリジッドに限定されてはいず、当初から、より北方の地域と重なり合っていたものであり、のち東北一帯へ拡大した、という結論を示す。

Ⅰ 問題の所在と従来 of 諸説

1 問題の所在

表題に地理学的考察と付した。最近『文学 人 地域——越境する地理学』(杉浦芳夫編1995)などにみられるように、「文学作品を目の前にし、地理学(関連分野)の立場からそれらを自由に読み解き、解釈する」(杉浦による同書の序文)試みがなされ、宮沢賢治に関しても地

* 岩手大学教育学部

理学的立場からの研究（例えば青山 1985，増穂 1995）が試みられている。

宮沢賢治は、地理学、特に自然地理学的な問題にも深い関心を寄せ、特に地形や気候に強い興味を示すとともに、世界各地の地理的知識やそれに基づくイメージも作品に盛り込んでいた。一方、宮沢賢治は独特の造語がその作品の特徴の一つである。

その地理的関心と造語との接点である地名造語いにかえれば創作地名の問題は、宮沢賢治研究の重要な一部であるとともに、地理学からみても興味深いテーマである。なかでも最も重要な創作地名の一つ「イーハトヴ」とその類語は多くの研究者の関心を集めてきた。

私はこれまで「東北」、「三陸」など岩手を含む広域の地域名の由来やその変遷、「北上盆地」などの岩手に関わる自然地域名についての研究も行う一方、賢治造語「羅須」の考察（米地 1995）や、賢治の地名造語の問題にも触れた研究も行った（米地 1992, 1993）。

宮沢賢治の「イーハトヴ」の問題は、これまで国文学などの宮沢賢治研究者たちの多くの論考があるが、安藤（1984）が指摘しているように、なお残された問題も多い。私にとり、前記二つの研究のオーバーラップするテーマで、私はこの「イーハトヴ」に対し、地理学側からの視点、および岩手に育ち、住んでいるものの視点からの分析を加えてみようと思つた。これによって、最近では岩手県のイメージを表現する雅称として頻繁に用いられるようになり、すでに地名ないしは地域名としても定着しつつある「イーハトヴ」とその類語の本質的な性格を再吟味する一助としたいと考えている。

この論文では、「イーハトヴ」という表記を、「イーハトブ」、「イーハトーブ」、「イーハトーボ」等の各種類語を代表するものとして用いる。安藤（1884）は「イーハトーブ」の語を総称として用い、その理由として賢治がこの系譜の語を最後に使用した昭和7年の「グスコブドリの伝記」において、「イーハトーブ」の形態が統一的使用されているので、便宜上、総称とするとした。確かにそれも一理あるが、賢治がもしももっと長生きしたならば、また表記形態を変えたであろうから、私はむしろ賢治が本格的にこの創作地名を世に出した初期の表記「イーハトヴ」を用いた方がよいと考える。この表記はその後も繰り返し多用されているので、本稿ではこれを代表的な表記とし、この「イーハトヴ」と他の類語とを合わせた総称として「イーハトヴ類語」と呼ぶことにする。

また、このイーハトヴの問題をとりあげる際には、次の三点に留意しながら考えたい。これまでは、これらが曖昧であったため誤った推論、結論が生まれがちであった。

① 「イーハトヴがある地域（例えば岩手）に対応すること」と、「イーハトヴの名がある地名（例えば岩手）に由来すること」とは、別な、互いに独立した問題である。このことは、架空の地名としては、井上ひさしの「吉里吉里国」が宮城・岩手両県境部の東北本線沿線の内陸部に想定されているが、その由来は海岸部の吉里吉里という地名に由来するという例によって説明できよう。実在の地名でいえばニューヨークが英国のヨークに由来するが全く他の地域である、というように例は無数にある。

② イーハトヴの名がある地名に由来するとは限らない。架空の地名には、地名に由来しないものも多い。例えばユートピアがそうである。後述の竹下説もこれに属する。

③ イーハトヴがある地域を示す語であるとしても、その地域の範囲がいつも同一の範囲に固定しているとはかぎらない。例えば「東北」という地名が東北六県に限られるか、新潟をも含むか、あるいは「東北町」という青森県のある町を指すか、などを考えれば自明のことであ

る。

2 イーハトヴの由来に関するこれまでの説

イーハトヴという宮沢賢治の造ったユニークで魅力溢れる架空地名の由来については、これまでも多くの説が唱えられてきた。その中では、「いはて（岩手）」に由来し、テをエスペラント風に母音 *o* をつけてトにし、ドイツ語の場所を意味する *wo* ヴォをつけたのであろうという恩田逸夫（1981）の次のような説が最も有力のようであった。

「岩手」の歴史的仮名づかい、「いはて」に基づいて〈いはて *ihate*〉の *te* を、エスペラントの名詞の語尾づくりのように母音 *o* で終わる語として〈*ihate* → *ihato* イハト〉としたのであろう。

そして、岩手県の「県」に当たるところは、ドイツ語で「場所」を意味する〈*wo* ヴォ〉をつけて〈イハトヴォ（岩手というところ＝岩手県）〉と造語したのであろう。「ヴ・ブ・ボ」を「ヴォ」と同じに用いていることは、いうまでもない。

この説は、本論の巻頭に掲げた賢治自身が書いたとみなされている「新刊案内」ちらしの中身と一致し、一般に受け入れられ、定説とみなされてきた。

しかしながら、この説には以下にあげるような多くの疑問点がある。

- ① なぜ歴史的仮名づかい、「いはて」を用い、イワテという発音に従わなかったのか。
- ② なぜ「岩手」と「県ないしは場所に当たる語」とを一緒に接着して造語したか。
- ③ 語尾をヴォとした上、なぜ途中の *t* (*ihate* の *t*) にも *o* をつけたのか。
- ④ 語尾がヴォの形は、ヴ（ブ）の形より後に登場するのに、なぜ *wo* に由来するのか。
- ⑤ ドイツ語の *wo* ヴォをつけるというのは、意味からいって妥当か。
- ⑥ イハトヴォであったはずが、なぜイーハトヴォとして用いられたのか。

①について考えてみよう。旧かなづかいで書いてあっても、発音はイワテであるから、なぜ「イーワトヴ」としなかったのかという点で、この説には決定的な欠陥がある。須田（1964）は、「岩トヴ」であるから「イーWA トーヴ」と発音すべきという主張をしているが、これは、賢治が自らが版を切ったという「農民歌」の楽譜（佐藤 成 1992 所収）のタイトル¹⁾の中で、イーハトヴを *ĪHATOV* と書いていたことや、羅須地人協会時代のノート（校本全集 12 巻下のいわゆる MEMO FLORA ノート）の中で賢治が *ĪHATOVO* と記していることと矛盾する。いずれも「イーHA……」となっていることは、須田説を否定するとともに、恩田説も次の用例に照らして否定されよう。

それは、賢治が童話「ポラーノの広場」において塩竈のもじりを「シオーモ」と書き、旧仮名づかいの「シホーモ」とは標記していないことである。このことは、もし岩手をもじった語であればカタカナで「イーワトヴ」と書いていたはずであったことを示すとともに、「イーハトヴ」の読みが「イーWA……」ではないことを裏付けている。

②については、イーハトヴが、イーハトヴ地方、イーハトヴ県などと用いられていることから、トートロジーになってしまうので否定される。他方、イーハトヴ火山、イーハトヴ川などの用例の場合も、モデルの岩手山がイーハト山でない、など不自然である。

③「いはて(岩手)」に由来し、テをエスペラント風に母音oをつけてトにしたというのは、テを語尾とした場合で、それにヴォなどもつけて新たな語尾を付加する場合には不必要な操作である。またエスペラント語でも既存の地名や人名などの固有名詞にoをつけて改変することはないはずである。

④イーハトヴ系の語が登場するのは1922~23(大正11~12)年である。いずれも語尾はuで終わり、oで終わる形は1924(大正13)年からみられる。したがってドイツ語の場所を意味するwoヴォをつけたのであろうという説は成り立たない。

⑤については既にC(1971)という筆名のコラムニストの批判がある。すなわち、「どこに」というドイツ語のwoをつけるという、そのwoは英語のwhereにあたり、それ自体「場所」の意味はなく、発音は常に「ヴォー」であって「ヴォ」ではない、と恩田説に疑問を投げかけているのである。

ローマナイズした場合も、当初はĪHATOVとVで終わっていたのであるから、一層woとは考えにくいと私は考えている。のちĪHATOVOと記した場合にもĪHATOWOではなく、やはり「ドイツ語のwoをつけた」という説は極めて不自然である。

⑥「いはて」によるとすれば、イハトヴォであったはずが、なぜイーハトヴォになるのかについて恩田は何も説明していない。説明できないのである。語の後半についてはトヴにしたりトーヴにしたり長短両方の形をとっている賢治が、前半についてはイーハのみ(このほか広告にイエハがある)でイハは全く存在しない。イハトヴが語呂が悪いならばイーハトヴでもよかつたはずである。賢治にはセンダード、モリーオ、ショーモなどのように、既存の地名の終わりの方を延ばす変形が多いのに、恩田のいうようなイハテの変形ならばあってよいはずのイーハトヴという形がないという事実が説明できない。

以上のように恩田説は、一見妥当に見えるものの、分析してみると疑問点が多く、論理的に説明ができていないと評せざるを得ないのである。

竹下数馬(1983)は、この語イーハトヴがドイツ語文のIch weiß nicht wo.に由来し、それを短縮したものである、という説をとるが、ローマ字綴りの語尾がvになる点が説明できず、また初めの部分がIchで始まるという説なので、語頭のIの上にウムラウトが付いていることと合わない、など、これまた疑問がある。最も不自然なのは、短縮の過程で、どうしてイヒヴァニヴォーないしはイヒヴニヴにならずイーハトヴになったかという点である。荘子の「無何有の郷」やトマス・モアのユートピアのような「どこにもないところ」から賢治が思いついたと説くが、この説は、おそらく、イーハトヴが理想郷の名であろうと考えた竹下氏が、「無何有の郷」を連想し、これをイーハトヴに近いドイツ語の言い方を探す、という手順で考えてみたというに過ぎないのであろう。

岩戸すなわち神話の「天の岩戸」に由来するという説は、前述の岩手(いはて)説と同じようにイワをなぜイハとしたか、イーハとのばしたかなどの疑問がある上、日本神話が唐突に用いられている点が説明できない。

このように、イーハトヴの由来には、まだ新しい考え方を試みる余地があるように思える。私は羅須地人協会の「羅須」についても類推を行っている(米地1995)が、「羅須」の場合は短い語のため、由来に関して多くの説が出されている。これに対して、イーハトヴはその由来を考察するのが難しく、また〈岩手いはて〉説が有力とされたためか、あまり多くの説はない。したがって、その使用例や変化の過程などの分析を行ってみるにより、その手掛かりをえた

い。

II 「イーハトヴ」類語の初出と表記の諸形

1 賢治の初期のイーハトヴ類語の使用例

地名イーハトヴの最も早い使用例は、1923年（大正12）年の詩草稿「イーハトヴの水霧」で同年11月ごろの作品であると『語彙辞典』は記している。これは小倉豊文（1956）の叙述に従ったものとみられる。

しかし、「水河鼠の毛皮」《『岩手毎日新聞』1923（大正12）年4月15日》の方が早い。このことについては、既に境（1968）が「成功作とはいいいがたいが、すでにイーハトヴやペーリングの地名が出ている点が注目される」と記している。この作品では「ペーリング行きの列車に乗ってイーハトヴを発った人たち」の話ということになっている。ペーリングへと発つ起点は、この作品が書かれたころの賢治に「一本木野」（23.10.28）という詩があり、「電信ばしらはやさしく碍子をつらね ペーリング市までつづくとおもはれる」とあり、岩手山の東麓、盛岡北西の原野がそれであった。

「水河鼠の毛皮」は、少なくとも活字化されたものとしては、「イーハトヴ」の名が世に出た最初の作品である。これに続くものとして、詩草稿「イーハトヴの水霧」があり、二三・一一・二二という日付²⁾が入っている次の短いものである。この詩は詩集『春と修羅』1924（大正13）年4月発行に収められている。本文に付された題は「イーハトヴの水霧」であるが、目次には「イーハトヴの水霧」となっている。校本全集などでは、目次の方を採らず、本文の方を正式の題名としているのは当然であろう。もっとも、この両表記があるため混乱し、校本全集第二巻の初版で「イーハトヴの水霧」の方を題名とした箇所もあって、初版二刷からは「イーハトヴの水霧」と訂正している。新校本全集第二巻にはこの「イーハトヴの水霧」が採られているが、脚注に《詩集印刷用原稿における最終形態は「イーハトヴの水霧」であった》ことが示されている。

このややこしい一連のことから、二つの点が指摘できよう。第一には当初から「イーハトヴ」と「イーハトブ」とは混用され、混乱していたこと、第二には詩集印刷用原稿における最終形態が「イーハトヴ」であったので、賢治自身はこの方を本来の表記と考えていたと推定されること、の二点である。詩は次の通りである。

けさはじつにはじめての凜々しい水霧^{ひやうも}だつたから
みんなはまるめろやなにかまで出して歓迎した

なお『春と修羅』刊行後に、同人誌『銅鑼』（1925創刊）12号に同じ「イーハトヴの水霧」の題でほぼ同じ内容のものが再録発表されている。

草稿の詩の日付が、11月下旬であるから、この水霧は1925年1月25日の日付のある森林軌道（作品第407番）の始めにでてくる「岩手火山が巨きな水霧の套をつけて」と同じく岩手山の光景³⁾かと思われる。1923年10月28日の日付の作品に詩「鎔岩流」があり、「イーハトヴの水霧」はその次の作品である。

次に、イーハトヴと結び付く「水霧」の初出を探ろう。詩集『春と修羅』のなかの「コバル

ト山地」22.1.22 は、「コバルト山地の水霧のなかで」と始まる。このことから、賢治は、1922 年頃から水霧に関心を寄せ、おそくとも 1923 (大正 12) 年ころまでには、この水霧の世界を表現するものとして造語イーハトヴを発想したのであろう。その表記は、はじめ「イーハトヴ」であったが、編集、印刷などに関わる人達との接触ののちに「イーハトブ」にしたものと考えられる。なお、この段階で「イエハトブ」という表記も存在したが、これについては後述する。

安藤 (1984) は「イーハトヴ」の最初の使用例は、1922 (大正 11) 年 7 月中旬以降の執筆と推定される「毒蛾」(この作品では「イーハトブ」が用いられている⁴⁾) と考えられる、とし、年代順リストの筆頭に大正 11 年の作品として挙げている。その根拠は菊地 (1967) が大正 11 年 7 月の新聞記事に基づいて、この大発生の直後に執筆したものであろうと指摘したことに拠る。さらに、同年の大発生についてより詳細な新聞記事の点検を行った對馬 (1993) によれば少なくとも同年 7 月 20 日以降の執筆と推定されるという。

1922 (大正 11) 年 7 月中旬以降という推定は、その時期、盛岡市を中心に毒蛾が大発生したことに拠っているが、「毒蛾」が直ちに執筆された⁵⁾ という証拠はなく、執筆の可能性のある時期の上限を示していたに過ぎなかった。

ところが私は「毒蛾」が毒蛾大発生の年よりも一年後の大正 12 年 7 月以降の執筆であることの確証を得た。この新説については別報 (『宮沢賢治学会イーハトブセンター会報』投稿中) で詳説する予定であるが、その要点を述べれば、大正 12 年 7 月中旬に再び岩手県下に毒蛾が発生したこと⁶⁾ と、その同じ時期に文部省から派遣された井上督学官が同県を巡回しており、花巻農学校も訪ねていることが、『岩手日報』の記事から明らかになったからである。「毒蛾」の話に語り手として登場する文部局巡回視学官は、この督学官がモデルであり、明らかにこの時期以降に「毒蛾」は書かれたのである。

この童話の「イーハトブ」には、北方的雰囲気はない。蒸し暑さが強調され、毒蛾除けの焚き火が燃えるマリオは「これは遥かの南国の夏の夜の景色」のようだと書いている。のちにこの毒蛾の部分が「ポラーノの広場」ではセンダード (仙台のもじり) の話として用いられるのは、「ポラーノの広場」の中の「夏でも底に冷たさをもつ青い空」というイーハトブヴォとむしろ対比させて、南となりの県と想定されたセンダードに話を移したのである。したがって賢治にもイーハトヴのイメージに適さないことが自覚されていたのであろう。

すなわち、「毒蛾」はイーハトヴの初出ではなく、イーハトヴの使用は 1923 (大正 12) 年 4 月発表の「氷河鼠の毛皮」に始まり、北方的雰囲気のものであったのである。

2 「イーハトブ」類語の表記の諸形

「イーハトブ」類語については、安藤 (1984) が 7 種類の表記を賢治が用いていることを述べている。カナ書きとしてはそのほかに「イエハトブ」があり、このほかに 2 種類のローマ字表記があり、さらに類似のものとして「イーハスト」があるので、私はこの 11 種類の表記について検討を行った。以下に各表記使用の時期、作品等の名などを掲げる。これは悉皆調査ではなく、省略したものも多いが、主要な用例は掲げたつもりである。

- | | | |
|---------|-----------------|--------------------|
| ④イーハトブ | 1923 年 4 月 15 日 | 童話「氷河鼠の毛皮」『岩手毎日新聞』 |
| イーハトヴの友 | 1923 年頃 | 童話稿「税務署長の冒険」 |
| イーハトヴ川 | 1923 年 7 月 12 日 | 詩「夏幻想」(下書稿) |

イーハトヴ地方	1924~25年	童話稿「猫の事務所」(草稿形)
イーハトヴ童話	1924年	『注文の多い料理店』扉・広告ちらし
イーハトヴ県	1926年2月	詩「心象スケッチ朝食」
イーハトヴ第七支流	1926年8月	詩「『ジャズ』夏のはなしです」『銅鑼』
イーハトヴ農民劇団	1929年?	文語詩稿「ポランの広場」
イーハトヴ河	1931年~	詩「(丘々はいまし)」
②イーハトブ	1924年4月	詩集『春と修羅』
イーハトブ地方	1923年7月~	童話稿「毒蛾」
イーハトブさん	1923年?	童話稿「檜の木大学士の野宿」
③イーハトーヴ	1923年?	童話稿「ポランの広場」
イーハトーヴの死火山	1925年5月7日	詩「遠足統率」
イーハトーヴの市	1931年頃?	童話稿「グスコンブドリの伝記」
④イーハトーブ	1923年?	童話稿「ポランの広場」
イーハトーブ民譚集	1923年?	童話稿「二人の役人」表紙書き込み
イーハトーブ火山	1931頃?	童話稿「グスコンブドリの伝記」
⑤イーハトーヴォ	1930年頃?	童話「ポラーノの広場」
イーハトーヴォ海岸地方	1930年頃?	童話「ポラーノの広場」
⑥イーハトーボ	1925年8月稿	詩「下背に日の出をもつ山に関する童話風の構想」 作品第375番
イーハトーボ農学校	1926年?	童話「イーハトーボ農学校の春」
イーハトーボ地方	1927年8月	詩「ダリヤ品評会席上」
イーハトーボ警察署	1930年頃?	童話「ポラーノの広場」
イーハトーボの百姓	1931年頃?	童話稿「グスコンブドリの伝記」
⑦イエハトブ(童話)	1924年	『注文の多い料理店』広告はがき二種
⑧イエハトヴ(童話)	1925年	『イエハトヴ童話』『輸出向蔬菜栽培法』の広告
⑨IHATOV	1923~1925年?	楽譜“IHATOV” Farmers' Song
⑩IHATOVO	1926~1928年?	MEMO FLORA ノート
⑪イーハスト(地方)	1924~25年	童話稿「猫の事務所」(草稿形)

以上の各表記を分類すると、次のようになる。

「イーハトヴ」類語 < A: イーハトヴとその変形 < A-1: イーハ系: ①~⑥, ⑩
 B: イーハスト: ⑪ A-2: イエハ系: ⑦⑧, ⑨?

これを確実に賢治自身が書いたものだけに絞ると⑦⑧は消える。

さらに公刊されたもののみを採るとA-1の①②④のみとなる。

III 「イーハトヴ」とその類語表記の使用頻度と変遷過程

1 「イーハトヴ」類語の各表記の賢治による使用頻度

安藤(1984)は、彼女のリストに7種のカタカナ表記の使用例をリストアップした。イエハトヴ、イーハストおよびローマ字表記は含まれていないが、年代不詳のもの4例を含む62例を挙げ、中に他の表記への移行例5例が含まれているので、重複して数えると計67例となる。これは校本全集により、一作品に同一の形が二度以上使われている場合は一度としてある。異稿等の扱いは、この語の形の違う場合に別のものとして扱うなど、安藤は一定の基準でカウントしているが、その詳細は原論文を参照されたい。

この安藤のリストをもとに、数量的な分析を行った。

まず7種を使用例の多い順にあげよう。

1位 イーハトヴ 20例, 2位 イーハトーヴ 13例, 3位 イーハトーボ 10例,
4位 イーハトブ 9例, 5位 イーハトーブ 7例, 5位 イーハトーブォ 7例,
7位 イエハトブ 1例

これら表記の相違を要素に分解すると、次の四つの部分的な差異が基本になっていることがわかる。語頭の方から順に挙げてみよう。

- a イーとイエ
- b トのつぎに長音がくるかどうか
- c ヴまたはヴォを用いるかどうか
- d 最後の音としてoをつけるかどうか

aのイーハトヴとイエハトブの相違は、他の差異と違って、一般にはさほど問題にするべき重要性は認められない。なぜならイエハトブは作品中には用いられていず、単に広告にのみ登場するからである。ただ後に述べる方言との関係では注目すべきである。

bの相違、すなわち語の後半をトヴ(ブ)としたものとトーヴ(ブ)またはトーヴォ(ボ)と長音にしたものとに区分すると、前者は30例、後者は37例と拮抗している。

cのヴとブの違いを賢治はさほど気にしていなかったようであり、編集者や印刷者によって変えられたことも考えられる。両者の数は次のようになっている。

末尾がヴまたはヴォの例: 41

末尾がブまたはボの例 : 26

a・c以外の点に着目して3種とするとつぎのようになる。

イーハトヴ(ブ) 29例, イーハトーヴ(ブ) 20例, イーハトーブォ(ボ) 17例,

イエハトヴ(ブ)をイーハトヴ(ブ)のバリエーションとして扱えば、30例になる。

dについてみると、最後の音がヴ・ブとuになるものは50例、ヴォ・ボとoになるものは17例になる。

以上のことから、どの形を代表例とするかを考えると次の二つにしばられる。

使用頻度第一位：イーハトヴ

語の各部分の表現の形の多いパターンの組み合わせ：イーハトーブ

となる。語の後半の形は長音と単音とは拮抗しているから、その部分をいずれの形をとってもよいと考え、イーハトヴを代表としてよいと考える。

以上の分析は安藤が編んだリストを材料としたものであり、広告の類や未公開の原稿など殆ど全ての用例をもとにしている。しかし、賢治が生前、単行本、雑誌または新聞に作品として発表したもののみを挙げると、わずか6作品、のべ7件にすぎない。それらを公刊順に挙げると次の通りである。

イーハトヴ	1923 (大正 12) 年 4 月	「氷河鼠の毛皮」(『岩手毎日新聞])
イーハトブ	1924 (大正 13) 年 4 月	「イーハトブの氷霧」(『春と修羅]) (なお目次には「イーハトヴの氷霧」とある)
イーハトヴ	1924 (大正 13) 年 12 月	『注文の多い料理店』
イーハトヴ	1926 (大正 15) 年 2 月	「心象スケッチ 朝食」(『虚無思想研究])
イーハトヴ	1926 (大正 15) 年 8 月	「『ジャズ』夏のはなしです」(『銅鑼])
イーハトブ	1927 (昭和 2) 年 9 月	「イーハトブの氷霧」(『銅鑼])
イーハトーブ	1932 (昭和 7) 年 3 月	「グスコーブドリの伝記」(『児童文学])

したがって「イーハトヴ」を代表例とすることは、この点からみても妥当である。

当時、周囲の人々も「イーハトヴ」を多く用いたらしい。例えば賢治の親友藤原嘉藤治は藤原筆郎の筆名で、昭和8年10月6日付の『岩手日報』に追悼の詩「或る日の『宮沢賢治』」を寄稿している。その詩は当時花巻にあった藤原の家を賢治が訪ねてきたという光景が、詠われている。その末尾は次のようになっている。

賢さん行かう
ベエトウベエンの足どりで
イギリス海岸を通って行かう
イーハトヴの農場へ
トマトの童話でも聴きに行かう

2 「イーハトヴ」類語の変遷の過程

小倉豊文(1956)は、イーハトブ→イエハトブ→イーハトヴ→イーハトーブ→ヴォという系譜を認めたといい、「賢治の鋭い音感覚とその表現上の苦心を自らに物語っている」としている。これに対して安藤(1984)は、小倉の調査は不正確であるとし「この系譜には大きな問題がある」と批判し、「系統的な変遷はみられない」とした。私も安藤の指摘の小倉の揚げた系譜への批判

表 宮沢賢治によるイーハトヴとその類語の時期別使用回数

	第一期 1923	第二期 1924～1926	第三期 1927～1928	第四期 1929～1931	計
イーハトヴ	4	9	1	6	20
イーハトブ	4	3		2	9
イーハトーヴ		3	3	6	12
イーハトーブ		1		5	6
イーハトーヴォ		2	3		5
イーハトーボ		3	3	3	9
計	8	21	10	22	61

イエハトヴ、イエハトブおよびローマ字綴りのものを除く。
安藤(1984)のリストを用い、米地が数量化した。

は正しいと考える(しかしある程度の変遷の傾向は認められると私は考える)。安藤は、小倉がイーハトーボ、イーハトーブ、イーハトーヴに触れていない点を批判した。

また、『語彙辞典』は、「イーハトヴ」の項で、都合六種の表記を挙げ、「時期的にも不同で、表記変化の確とした根拠もないといわざるを得ない」という。

しかし、表のように区分してみると、そこには明らかにイーハトヴの表記の変遷の特徴が読み取れる。

第一期：1923(大正12)年(農学校時代前半)

イーハトヴ(ブ)のみの使用時期

第二期：1924(大正13)年～1926(大正15)年(農学校時代後半)

後半部の長音化と語の末尾のo音付加が始まる時期

第三期：1927(昭和2)年～1928(昭和3)年(羅須地人協会時代)

第二期の傾向がさらに進む時期

第四期：1929(昭和4)年～1931(昭和6)年(晩年)

各表記混用期

第二期から第三期への変化は、1926年12月賢治が上京してエスペラントを学んだことと関連すると思われる。しかし安藤はエスペラント語の影響に疑問を提示しており、今後の問題であろう。

第四期の各表記混用期は、実は未公開の原稿段階での混用がみられる「ポラーノの広場」や「グスコブドリの伝記」などが含まれるためである。このような未整理のものを除くと、公開された「グスコブドリの伝記」の「イーハトーブ」のみが残る。

系譜あるいは系統というほどには明確ではないものの、全体としては主たる用例の変遷の傾向は次のようにまとめられる。

イーハトヴ (ブ) → イーハトヴ (ブ) → イーハトヴ → イーハトヴ (ブ)
 ↓
 イーハトヴ (ブ) → イーハトヴ (ブ) → イーハトヴ (ブ) → イーハトヴ (ブ)
 (小倉: イーハトブ → イエハトブ → イーハトヴ → イーハトヴ (ブ))

このように小倉 (1956) のいわゆる系譜と形は一見似ているが、並べると、全く異なることがわかる。小倉は長音化、いわゆるエスペラント化、バ行をヴを用いて表記するような変化、など一方向の変化を想定しているが、実際は、長音化はみられるものの、他は元に戻ったり、併用が続いたりしており、定方向の進化のような系譜は編めないのである。

IV 「イーハトヴ」の地理的範囲

1 「イーハトヴ」とその類語の現実の地名、地域名との対応関係

賢治が「イーハトヴ」とその類語を現実の地名、地域名にどのように対応させていたかを推定してみると次のようになる。

イーハトヴ県: 岩手県 イーハトブ火山: 岩手山
 イーハトヴ河: 北上川
 イーハトヴ海岸: 三陸海岸 イーハトヴ海岸地方: 三陸海岸地方
 イーハトヴの市: 盛岡市
 イーハトブ町: 花巻町?, 盛岡市?
 イーハトブ農学校: 稗貫または花巻農学校

イーハトヴが「岩手」に対応するものとして、岩手県と岩手山があることは確かである。しかし、岩手川という河川は存在しない。「イーハトヴ河」が北上川に比定できるということについては、「イーハトヴ第七支流」(詩稿「Jaz」)が、詩『岩手軽便鉄道 七月(ジャズ)』の中の北上第七支流という表記の異稿であるので、対応関係が明白である。

イーハトヴ海岸は三陸海岸に対応するものである。当時、青森県八戸市の鮫角から岩手県をへて宮城県の大牡鹿半島に至る海岸は三陸海岸として知られていた。このころは、のちに国立公園名になった「陸中海岸」の語はなく、「岩手海岸」などという名もない。

「イーハトブの市」が盛岡を暗示するらしいことは、この語の用いられた作品『グスコブドリの伝記』の内容からほぼ明らかであるが、他の作品ではマリオとかモリーオと呼んでいるのに対して、より不鮮明である。これは後述するように、『グスコブドリの伝記』のイーハトブが、明らかに岩手県の範囲を遥かに超えた広い地域を指していることと関係があると思われる。

「イーハトブ町」は特定できない。「イーハトブの市」に対して「町」がつくので当時の花巻町ともみられる。しかし前述のように、童話『水河鼠の毛皮』の「イーハトヴ」は盛岡とみられ、「イーハトヴの町」も盛岡らしい。また、童話稿『ポランの広場』の最後に出てくる「イーハトブ町」には、毒蛾が発生したことになっていることから、毒蛾の話の最初の形である童話『毒蛾』のマリオ、盛岡の可能性が高い。毒蛾の発生地は童話『ポラーノの広場』では仙台とおぼしきセンダードとなるので、この両者の間に位置する『ポランの広場』では、盛岡と仙台との間の町、例えば花巻町と考えることもできよう。

宮沢賢治の童話『イーハトーボ農学校』は作品の内容から稗貫（花巻）農学校がモデルであることは明らかである。下肥を「……こいつを下台の麦ばたけまで持って行かう、こっちは崖はあんまり急ですからやっぱり女学校の裏をまはって楊の木のあるとこの坂をおりて行きませう。」とあるのは、稗貫農学校の西隣の花巻女学校の裏から、台地を降りる坂道を通して、北の農場（実習地で麦畑も20アールあった）へ行くことなのである。このことは佐藤（1992）が図で示した当時の稗貫農学校の校舎や農場の配置等とも一致する。この作品が大正11年5月ごろに初稿が書かれた（同12年夏に清書された？）とみられていることも、ちょうどそのころ賢治が稗貫農学校で実習を担当していたことと符号する。

これらの例から、名前としての「イーハトヴ」が決して「岩手」のみに対応するものではないことが分かる。すなわち、イーハトヴの用いられている語に対応する現実の地名の中には、盛岡または花巻に対応するような岩手県内の一部にすぎないものや、岩手県地域内に収まらない青森、宮城両県に跨がる三陸海岸や、宮城県に流下する北上川等が含まれる。

これは、センダード：仙台、モリーオ：盛岡、ハーナムキャ：花巻などの、現実の地名と1対1の対応をする単純な造語とは異なり、賢治の創作地名の中では例外的な、汎用型の造語であり、「岩手（いはて）」との直接の関わりはないことを示すものといえよう。

2 童話の中における「イーハトヴ」の地理的記述

次に作品、特に童話の中では、具体的に岩手県域をはみ出すような広がりを目指す記述になっているか、どうかを検証して見よう。

北へのはみ出しは二つの童話にみられる。童話「ポラーノの広場」にはこうある。

次の朝わたくしは番小屋にすっかりかぎをおろし一番の汽車でイーハトーヴォ海岸の一番北のサーモの町に立ちました。その六十里の海岸を……(中略)……だんだん南へと移って行きました。

モリーオ（盛岡）から汽車で行ける海岸でサーモというのは青森県八戸の鮫（さめ）港のもじりに間違いない。六十里は240 km、ほぼ八戸から牡鹿半島まで、いわゆる三陸海岸に相当する。青森県の一部のみならず宮城県域にも拡大させているのであろう。童話「毒蛾」では、イーハトヴ地方への出張から帰った文部局巡回視学官の話として「イーハトヴの首都のマリオ」とあり、その「マリオは、こゝから三百里も北ですから……」とも語らせている。1,200 km盛岡の南ならば、東京（約500 km南）よりも遙か南になる。もしも文部局のある場所が東京なら、三百里北は札幌である。賢治のイーハトヴには北海道のイメージが重ね合わされている可能性がある。賢治は北海道を愛し、岩手県ないしは東北の一種のモデルと考え、札幌を好ましく思っていた。その北海道や札幌の名が創作地名などの直接の素材となっていないのは、むしろ不可解であるが、もし岩手や盛岡、花巻などと一体化していたとすれば不思議ではない。

西へのはみ出しも考えられる。童話「グスコブドリの伝記」では、イーハトーブの表記が用いられている。作品中にイーハトーブ全体の地図がでてくるが、「……そのまん中を走るせねねのような山脈と、海岸に沿って縁をとったようになって山脈」とあって、後者は北上山地、前者は奥羽山脈にそれぞれ相当すると考えられる。さらにイーハトーブには三百を越える数の火山があり、イーハトーブ海岸に二百もの潮汐発電所が配置される。1~2 kmおきということではなからうから、240 kmよりもはるかに長い海岸線をもつことになる。イーハトーブのま

ん中にあたるイーハトヴ火山が岩手山とすると、イーハトヴは西へ広がるばかりか大きく北へも広がることになる。

私(1993c)は「グスコブドリの伝記」のイーハトヴを冷害との関わり、地図についての記述、火山の数の想定などから、この作品のイーハトヴは東北地方と北海道(おそらくは東南部)とに当たると考えた。

以上、童話3編の中のイーハトヴの記述について述べたが、実は賢治の童話の中でイーハトヴが登場するのは5編しかない。そのうち地名や地理的位置に関するものの載っている上記の3編全ての記述が岩手県域よりも広がっているように書かれているのである。

他の2編にはその地域の拡がりについての記述はない。しかし童話「氷河鼠の毛皮」には、ペーリング行きの特急列車はイーハトヴ駅を発車してほどなく唐檜(とうひ)やとど松の立つ野原を通り過ぎる、という話になっている。もちろんペーリング行きの特急は猛烈に早いという想定であるから当然にしても、イーハトヴの近くに北海道以北の植生があることになっている。

また童話「税務署長の冒険」は岩手とおぼしき地域の密造酒作りの話であるが、その中に地酒の銘柄として「イーハトヴの友」と「北の輝」の二つの架空の名が登場する。「北の〇〇」という銘柄は、現実には北海道産の酒以外にはないのである。

この2編の記述は必ずしもイーハトヴの岩手県外への拡大を直接的には示してはいないが、賢治のイメージの中では少なくとも北海道がイーハトヴに近いものと意識されていたということは読み取れよう。これを裏付けるものに、賢治の記載した『修学旅行復命書』がある。北海道旅行の帰途、苫小牧へ向かう車窓を眺めつつ「岩見沢を過ぎて夕陽白樺と柏との彼方に没す。この付近好摩滝沢辺に似たり。」と書いている。つまり、彼の愛した盛岡郊外の好摩や滝沢と北海道の風景が似ていることを記載しており、イーハトヴの景観として重なり合っていると思われる。

なお『語彙辞典』には、「『ドリームランドとしての日本陸中国岩手県である』と賢治は明記している」と記載されているが「陸中国」⁷⁾は誤りであろう。管見によれば「新刊案内」の文をはじめ、このような記述の文はみつかっていない。岩手県は陸中の大部分と陸奥や陸前の一部からなり、陸中とは一致しない。ちなみに賢治作品にしばしば登場する種山ヶ原は陸中と陸前にまたがっている。

もちろん『注文の多い料理店』新刊案内や詩「朝食」などの下書き原稿におけるイーハトヴ県という使用例がある。その新刊案内では岩手県がイーハトヴとされていることは確かではある。しかし、この新刊案内は主に岩手県内の書店に配布され、他には仙台の金港堂などに配られた(森1975)程度であるから、読者への働きかけの効果をねらって、特に岩手県と明記したのではあるまいか。この新刊案内以外には、公刊、未公刊のいずれの作品にも、地域を岩手県と特定したものがないことにむしろ注目すべきであると考えられる。

詩「朝食」の下書き稿にはイーハトヴ県とあるが、のち削られる。この詩のテーマの南部煎餅は、岩手県内のみならず青森県東部の旧南部領地域の特産でもある。その点でも岩手県と限定してイーハトヴ県としたとはいえない。詩「種山ヶ原」にはイーハトヴ県を展望するとある。この高原からの展望の範囲にはごく一部ではあるが宮城県北も含まれる。

賢治にはイーハトヴ県という用例は少ない。むしろイーハトヴ地方という漢とした言い方が多用されている。したがって、盛岡に当たる都市を県都と呼ぶ例は管見によれば見当たらず、童話「毒蛾」では、イーハトヴの「首都」のマリオと書いている。つまりイーハトヴは岩手「県」

という行政域にぴったりと重なるものではなく、漠とした「地方」なのであり、時には「首都」をもつ半独立的な国に近いイメージなのである。

賢治がむしろ「東北」という、「岩手県」より広い地域をイーハトヴとイメージしていた、と推定される例として、童話「二人の役人」や「税務署長の冒険」がある。前者には盛岡とおぼしき都市の郊外に「東北庁長官」が出遊するという話で、東北庁はその盛岡にあると思わせる書き方になっている。後者には「イーハトヴの友」という架空の酒の銘柄も登場するが、これを改稿するときのためのメモとして「村名(等)を東北風に」と書き込みがあり、岩手風には書いていないのである。

藤原嘉藤治(筆郎)の前掲の追悼詩「或る日の『宮澤賢治』」に「イーハトヴの農場」とある点も興味深い。もしも親友嘉藤治が岩手県をイーハトヴと解していたのであれば、地元岩手の新聞に寄せる詩であるから、イーハトヴの真ん中の、とかイーハトヴの一隅の、などとするのではないだろうか。イギリス海岸も(この詩の舞台の花巻の藤原の家も)もちろん岩手県をイーハトヴとすればその中に含まれるのに、そのイーハトヴの農場はイギリス海岸と同じく藤原の家から行けるとして並んでいる。ここで行こうというイーハトヴの農場とは、羅須地人協会付近で、当時はあまり普及していなかったトマトを賢治自身が栽培していたものを指すのである。藤原は「イーハトヴ」の核心を賢治の住んで居る場所、暮らして居た場所と想定していたのであろう。それは「イーハトヴ」が賢治の住む地域を中心に広がる伸縮自在な地名であることを理解していたからに違いない。

V 「イーハトヴ」の由来に関する新しい考え

1 「イーハ」の由来に関する新しい考え

このように考えるとイーハトヴの語にも、「岩手(いはて)」由来説とは異なる考え方の余地があるということになる。そこで、私が新たに考えた説の一つは、賢治の居住地花巻にちなんだ暗号的な造語であるという考えである。

いわて (岩手) 県

ひえぬき (稗貫) 郡

はなまきかわぐち (花巻川口) 町

としゃ (豊沢, とよさわを短縮して呼ぶ通称, 『語彙辞典』参照) 小路

このように賢治の住所の頭の文字をつなぐと、「いひはと」となるが、これを「イーハト」と書き、この地名の核とした。これに(o)vをつけて造語したのであると考えた。この(o)vの部分は、賢治自身も「ヴ」「ブ」「ーヴ」「ーブ」「ーヴォ」「ーボ」と変えていて、不安定で、「イーハト」の変わらぬ部分と対照的である。

この場合、この(o)vが何からとったかが問題になる。これについては、まだこれという考えはない。(次の節のtovの考え方も使えるかも知れないが……)

この暗号風の住所頭文字説は、この語尾の部分が説明しにくいものの、かなり説得力がある説であると私はひそかに考えていた。しかし、この説には難点が二つある。一つは「いひは」を「イーハ」と読むのは、旧仮名遣い的で、「いはて」が否定されるとすれば同様に、これも成り

立たない。第二には、寓話「猫の事務所」の草稿で、賢治は、まず「イーハトヴ地方の猫ども」と書いたものを「イーハスト地方の猫ども」と書き換えたり、「イーハストの野原のまん中」と書いたりしていることである。そうすると「いひは」までを使って、造語したのだということにすれば一応は辻褄が合うが、暗号風の面白さは、かなり損なわれてしまう。しいて頭文字に結び付けるならば、賢治の通称豊沢小路の住所は、正式には大字里川口十二地割であり、そのサトをストとしてみた、などということになろう。しかし、頭文字の「いひは」に拠ったとすると「イエハトヴ(ブ)」という初期の表記の一つとは結びつかない。

そこで、そのほかにも「イーハ」の解釈ができないものかを、あらためて次に考えてみることにした。その結果たどり着いた、もう一つの説は、方言である。「イエハトヴ(ブ)」という初期の広告表記は、二度、のべ三種のものが使われていることからみて、偶発的な誤りとは考えられない。すなわち、この「イエハトヴ」という表記は、1924(大正13)年に『注文の多い料理店』の広告がき二種類に用いられていることから、単なる誤植ではなさそうである。さらに、1925(大正14)年に光原社が出した小熊彦三郎著『輸向蔬菜栽培法』の奥付裏の広告には「イエハトヴ童話」とある(宮沢賢治学会イーハトヴセンター会報5. 宮沢賢治資料⑤)という。これは実見していないが、ヴで終わっているものとして、前述の表記の形の一つに加えた。

末尾がブにせよ、ヴにせよ、広告を出す光原社の編集や印刷に関わった人々が、語の前半をイエハのように発音していたのではないだろうか。それは、方言では《いいは……》という発音は、イイハとエエハの間くらい感じになるからである。

賢治自身もこれに近い発音をしていた可能性が高い。イーハトヴをローマナイズする際、賢治がĪHATOVと書いていたことは、前述の通りである。このĪ(Iウムラウト)は、このイとエの中間の音を示すのではないだろうか。とすれば、イーハトヴも、「イエハトヴ」のように発音する方が、原音? に近いかも知れない。なお、Ī(Iウムラウト)は森下喜一の『岩手の方言』(1982)も用いており、岩手県の方言ではイが中舌になる、すなわちiになると記している。音感が鋭く、外国語の発音にも堪能だったという賢治はこの表記の意味を正確に知っていたのではあるまいか。

では岩手を方言で呼べば、どう聞こえるであろうか。イワテは「イエワデエ」となり、決して「イエハテ」とはならない。もっとも、岩手県南で育った私は、昭和17年ころの学校で、よくチョウチョウを旧かな表記どおり「テフテフ」とふざけて読んでいた経験がある。そう考えれば、さきにいったん否定した「岩手説」も、「イエハテエ」と冗談に発音して「イーハトヴ」が生まれた可能性も残っているといえよう。

方言で《いいは……》といった場合、どういう意味になるであろうか。「もう、いいは……」とか「こんで、いいは……」といえ、ば、「もう、いいから……」とか、「これで、いいだろう……」といった意味になる。この《いいは……》という意味もこめて、地名の前の「イーハ」になったと考えてみた。

賢治はしばしば彼の造語に二つの意味をもたせたり、二つの言葉から合成したり、隠された意味を裏に含ませたりする。例えば詩「春 水星少女劇団一行(仮題)」の中の火山の名「セニヨリタス」には煙を吐く葉巻の名と裾野をひくセニヨリータとの意味をかけている(米地1994a)。童話「どんぐりと山猫」の中の「笛ふきの滝」は、笛貫の滝と笛吹峠との合成であり、童話「ポラーノの広場」の「電気栗鼠」には電気仕掛けのような敏捷さとともに電気椅子をも

じった面白さがある。この両義性は、賢治が影響を受けた L. キャロルの Through the Looking Glass の中でいう portmanteau (かばん語) なのである⁸⁾。

由来についての私の仮説は、「イーハトヴ」は、「いいは」(いいから) という方言と、「いはて」のふざけた読みとを掛けた造語に、トブという語尾を付したということである。

方言「いいは」の登場する賢治作品としては『春と修羅 第一集』のなかの詩「噴火湾(ノクターン)」があげられる。この中に、妹トシの生前の言葉が挿入されている。

《おらあと死んでもいいはんて
あの林の中さ行くだい
うごいで熱は高くなっても
あの林の中でだらほんとに死んでもいいはんて》

死んでもいいから、あの林の中に行きたい。動いて熱は高くなっても、あの林の中でなら本当に死んでもいいから……、という切ない訴えの言葉である。

この作品が書かれたのは、1923年8月であるが、その前年の秋、妹トシは亡くなっている。しかし、賢治にとって、トシの言葉は決して忘れられぬものであったろう。死んでも「いいはんて」⁹⁾、といわせるほどのいい場所、それを表現するのに、トシの言葉を用いて、「イーハトヴ」を造語したのではないかとも考えられるのではないだろうか。賢治は最愛の妹トシ(詩のなかでは「とし子」)の、死期の迫ったころの言葉(方言)を用い、これに、「いい場所」という意味もこめたのではないだろうか。それほど妹を魅きつける林……、それこそイーハトヴの象徴とみることができよう。

「噴火湾(ノクターン)」のなかの《いいはんて》すなわち「いいから」という言葉から、イーハトヴという地名が生まれたとはいえないだろうか。イーハトヴという名の核の部分が「噴火湾(ノクターン)」の中のとし子の言葉による命名とすれば、語尾は冷たい北方の世界に由来するものになるのは当然のことのようにも思われる。伊東守男(1970)がイーハトヴを、「常に死の影の色濃く落ちていく世界」と論じたが、その命名が妹トシの死を前にして、死んでもいいからいきたい場所がある、という言葉に因んだものとすれば、この指摘に整合的であるといえよう。

2 「トヴ」・「スト」の由来に関する新しい考え

では、後半部のトヴあるいはトーブは何からきているのだろうか。おそらくはロシアないしは東ヨーロッパの地名につく～tov という語尾を真似たものと思われる。例えば、旧ソ連、現ロシアのサラトフ Saratov やロストフ Rostov などに類するものとして造ったのであろう。トブと濁らない形にするよりもヴとする方が響きがよい、あるいはより外国語らしいと考えたのではなかろうか。これをトヴまたはトブと発音し、あるいはoをつけてトーブとしたと思われる。

語尾が外国地名からの借用であろうということは、「猫の事務所」の草稿で、「イーハスト地方の猫ども」、「イーハストの野原のまん中に」などとあったりすることからも推定できる。つまり「イーハトヴ」も「イーハスト」もおなじ発想から生まれており、「イーハ」は共通で、「……トヴ」と「……スト」がそれぞれ語尾になる。後者は、ハンガリーのブダペスト Budapest や、ルーマニアのブカレスト Bucharest などに似せて～st をつけたのであろう。これらロシアない

しは東ヨーロッパの地名が¹⁰⁾、イーハトヴの造語に関係したであろうと思われる傍証としては、この語の最も早い使用例が、すでに冬のおとづれた岩手の事象を歌った詩で、寒冷な地域のイメージが描かれていることや、その翌年の『注文の多い料理店』の広告らし文にある、イーハトヴを「イヴン王国の遠い東」とする文章からも、ロシアの大地との関係を意識しているとわかること、などが挙げられる。

おわりに

「イーハトヴ」の由来に関しては、これまでの諸説にはそれぞれ矛盾や無理があり、なかで最も有力とされ、一般に信じられている「岩手(いはて)」に由来するという考えも、再検討の要がある。発音について微妙な点まで吟味し、表記を工夫し続け、変化させた宮沢賢治なのである。その賢治が、実際の発音とは異なる旧かなづかいの「イハテ」に基づく表記を用いたとすれば、その後一度も「イワテ」的な表記を試みなかったとは思えない。

しかし、これまでの説に代わる由来を考えることは難しい。私も敢えて「住所頭文字」説、「方言いいは」説などを提示した。これらは、まだ積極的、直接的な確証はなく、いずれもスペキュレーションにとどまるが、今後も検討を重ねたいと考えている。

イーハトヴの中心と想定された地域が岩手県域であることは確かであるが、賢治の心象のなかでは、それは北へ拡大されていた。イーハトヴの語は、賢治の1923年の7月末から8月中旬までの北海道経由の樺太(サハリン)旅行やその前年1922年の妹トシの死と関わって、構想されたと考える。イーハトヴの語の最も早い時期の用例が童話「氷河鼠の毛皮」と詩「イーハトヴの氷霧」であることは、氷すなわち北や寒さのイメージとイーハトヴが結びついていることを示している。それは「トブ」という語の後半の部分が、恐らくはtovとつくロシアや東欧の地名にならったものとの推定と結びつくのである。この樺太旅行が妹トシのレクイエムを作る旅でもあったことはよく知られている。「オホーツク挽歌」「青森挽歌」や「噴火湾(ノクターン)」などの詩がそれである。「噴火湾(ノクターン)」のとし子(トシ)の言葉《死んでもいゝはんて》から「いゝは」すなわち「イーハ」という語の前半部が採られたとは考えられないだろうか。

その後、賢治は東北の各地にも岩手県と同じく強い関心を寄せるようになった。それは同じく冷害を受ける地域であり、酸性土壌に悩まされる地域であるためである。東北採石工場の技師となり、石灰を販売するために東北各地を飛び回る。このころイーハトヴは東北一円にも拡大されるのである。

岩手イコール「イーハトヴ」とするのは、観光や地域づくりに関わる立場からは当然かもしれない。事実、そのような1対1対応の見方で、イーハトヴ類語が、単なる文学作品の中の創作地名から、現実の地名、地域名の別称として定着しつつある。このことについて異論をとえないつもりはないが、賢治自身が考えた「イーハトヴ」はもっと柔軟で可塑的であり、ある時は盛岡、ある時は花巻、時には岩手県を指し、さらにはより広く東北の一部ないし全部を指し、場合によっては北海道をもイメージに組み込んでいたのである。その由来も「岩手(いはて)」に求める見方も捨てきれないものの、おそらくは他の由来があるか、「いはて」を含む複数の由来に基づくものかの、いずれかであろう。

伊東(1970)は「イーハトヴは岩手県ではない」という文を書いている。イーハトヴは現

実の土地に比定されるべきものではない、ということになるだろうか。文学作品のモデル詮索そのものを批判する文であり、その限りではこの小論とはあいられない。しかし、前述のようにイーハトヴに死の影を見いだしている点では、小論と共通するものがある。それは三好（1978）のいう「理想郷でありながら、同時に悲惨な土地」の故でもあろう。

私は賢治のなかでイーハトヴは多様な形に変容していったと考えている。その過程で語の後半部の北方性は薄められ、多様な表記も生まれた。これに対して語の前半部は保存され、死の影を伴い続けた。しかしながら、その死の影と表裏一体のものとして、生命の賛歌がイーハトヴを舞台として描かれる。「グスコブドリの伝記」の結末におけるブドリの献身による死とイーハトヴの人々の生との描写はこれを示している。

架空地名によって宮沢賢治は、既存の地域認識から我々を解き放ち、新しい革新され創造された賢治の世界に導くのである。地理学ないしは地名学という視点からみれば、賢治は架空地名によって、地名のもつ創造性を証言したのであり、彼の架空地名に含蓄された意味は大きいのである。

もちろん架空地名そのものは、作家の創作活動から生まれたものであるから、それは一種の創造的な成果ではある。しかし、一個の地域または地点に一個の名称を与えることは、実名を作品の中に用いることと本質的にはほとんど変わらない。それは清水（1980）が「小説のなかに実在の地名や町名を意図的に書きこむことは、現実のある都市の内部にひとつの虚構の物語をかしあたえた上で、その全体に対するある読解を試みることにほかならない」と述べていることに通ずる。単にモリーオとのみあるならば、読者は盛岡への賢治のある読解を探ろうとするのである。これに対してイーハトヴとした場合は、より創造的な、賢治のいわば四次元的世界であることとなり、イーハトヴの首都モリーオは盛岡を超えた土地となるのである。それはイーハトヴが岩手県そのものの異称ではなく、花巻も岩手も東北のいずれをも超えた、四次元の変幻自在な心象空間の名であるからである。その意味で、イーハトヴは真の創作地名ということができるのである。

注

- 1) 佐藤泰平 1995 は「つめくさ灯ともす」の邦語題を用いている。
- 2) 『語彙辞典』のなかの年譜には、上記の日付の箇所のほか、誤って一年前の 22・11・22 の箇所にも、この詩の記載が入っている。
- 3) このことから、「イーハトヴ」は本来は岩手山という山の異名として考えられた可能性があるのではないかと筆者は考えたことがあった。この岩手山は富士山などとともに、火山弾を噴出した火山として、当時知られており、宮沢賢治にも「気のいい火山弾」という岩手山の火山弾に関する童話があり、続橋(1981)によれば、大正 10 年頃の執筆かと推定されている。また、詩「東岩手山」22.9.18.にも火山弾が登場する。これらのことから筆者は「イーハトヴ」について、賢治が火山弾からの連想により、「岩飛ぶ」から名付けたものではないかと新たに唱えた(米地 1994a)つもりであったが、金子(1979)が既に「岩は飛ぶ」から名づけたのではないかと類似のアイディアを書いていたのを見落としていたことが後にわかったのであった。これらの「岩飛ぶ」説の類も「イーハトヴ」の読みが「イーWA……」ではないことから、やはり可能性は少ない。
- 4) 「毒蛾」は、新校本全集 9 巻の校異篇によれば清書後手入稿となっている。下書き原稿は残っ

ていないので、当初から「イーハトブ」が用いられていたか、あるいは「イーハトヴ」であったかは不明である。

- 5) 賢治は博物学は担当はしていなかったが強い関心をもっていたから、毒蛾については新聞記事を切り抜くなどして、素材は手元にあつて、毒蛾発生直後でなくとも執筆は可能だったのではないだろうか
- 6) なお、毒蛾は大発生の翌年にも再発生することは、筆者も第二次大戦後の岩手県で同様の毒蛾の大発生後一、二年は発生が続いた体験をしている。
- 7) 賢治が陸中国を用いるのは、主に歴史景観に関わる作品の場合である。特に、いわゆる「松並木論争」(中地文 1995) と関係のある作品の詩「陸中の五月」や、その異稿「行脚僧の五月」、あるいは「農民芸術概論綱要」などがその例である。
- 8) キャロルのこの作品からの影響を考えると、この作品の中の Jabberwocky の歌の中に、穴熊やトカゲや栓抜きに似た架空の動物の名として toves が出てくることにも注目したい。かばん語的に考えれば、イーハトヴの tov は、後述の外国地名の語尾を真似るとともに、この歌の tov にも引っかけた可能性はある。また同じ詩に、raths が出てくる。米地 (1995) は羅須地人協会の「羅須」はレス土壌の旧呼称であるラスに因ると推定したが、この rath(一種の若い? 緑の? 豚であるという) にも掛けている可能性がある。伊藤 (1984)・原 (1990) をはじめ、キャロル作品が賢治に与えた影響について論じた例は多いが、この両語に触れた論考はこれまで無かったようである。
- 9) 「いいは」は、収録誌によって「いいは」「いゝは」など表現の異なる場合がある。
- 10) また、1921 年に独立宣言し、1923 年に正式に発足したモンゴル高原の一隅の高原国・トゥヴァ人民共和国 (Tuva 時に Touva と綴られ、また、タンヌ・トゥヴァ Tannu Tuva ともいう、米地 1994b 参照) の話を知り、これにヒントを得た可能性も残る。

文 献

- 青山宏夫 (1985) 「文学からみた『場所のイメージ』— 宮沢賢治『グスコブドリの伝記』— を例として」、『理論地理学ノート'85』。
- 安藤恭子 (1984) 「『イーハトブ』についての一考察— 語の成立とその使用について—」、『中央大学国文』, 27。
- 伊藤真一郎 (1984) 「賢治とルイス・キャロル」、『国文学 解釈と鑑賞』, 49-13。
- 伊東守男 (1970) 「イーハトブは岩手県ではない」、『ユリイカ』昭和 40 年 7 月臨時増刊号。
- 小倉豊文 (1956) 「新しい古典復刻の弁」, 角川文庫『注文の多い料理店』解説。
- 恩田逸夫 (1981) 「賢治童話の造語例」, 『宮沢賢治論』3, 東京書籍
- 金子民雄 (1979) 「山と雲の旅— 宮沢賢治・童話と詩の舞台—」, れんが書房新社,
- 菊地忠二 (1967) 「短編『毒蛾』の創作について」, 『四次元』, 19-5。
- 境 忠一 (1968) 『評伝・宮澤賢治』, 桜楓社
- 佐藤泰平 (1995) 『宮沢賢治の音楽』, 筑摩書房
- 佐藤 成 (1992) 『証言 宮沢賢治先生』, 農文協
- 清水 徹 (1980) 「小説のなかに実在の地名を使うことについて」, 『群像』1980-5。
- 杉浦芳夫編 (1995) 『文学 人 地域— 越境する地理学』, 古今書院
- 須田浅一郎 (1964) 「イーハトブの発音」, 『四次元』, 16-3。
- 竹下数馬 (1983) 「大正期における宮沢賢治」, 『立正大学人文科学年報』, 別冊 4。
- 對馬美香 (1993) 「宮沢賢治の短編『毒蛾』について— 『岩手日報』『岩手毎日』の新資料を加えて—」, 『弘前・宮沢賢治研究会誌』, 8。

- 続橋達雄 (1981) 「賢治童話全作品目録」, 『国文学 解釈と教材の研究』, 31-6.
- 中地 文 (1995) 「古いみちのくの断片を保てー宮沢賢治と《松並木問題》ー」, 宮沢賢治学会研究
発表資料
- 増穂栄作 (1995) 「賢治とその自然観ー森から聞こえてくる声の秘密」, 『地理学報』, 30.
- 原子 朗編著 (1989) 『宮沢賢治語彙辞典』, 東京書籍
- 原 昌 (1990) 「賢治とL. キャロル」, 『児童文学世界』 '90年春号.
- 三好京三 (1978) 「『グスコブドリの伝記』イーハトーブの農民」, 『国文学』 23.
- 森荘巳池 (1975) 「『注文の多い料理店』」, 続橋達雄編『注文の多い料理店』研究 I.
- 森下喜一 (1982) 『岩手の方言』, 教育出版センター
- 米地文夫 (1992) 「『フィールドワーカー型仏教者』智学・慧海への宮沢賢治の憧憬について」, 『宮
沢賢治学会イーハトーブセンター第2回研究発表記録集』.
- 米地文夫 (1993) 「宮沢賢治『グスコブドリの伝記』のサンムトリ火山ーモデル・サントリン火
山説への疑問と磐梯火山説の提唱ー」, 『宮沢賢治研究 Annual』 3.
- 米地文夫 (1994a) 「岩手山の呼び名いろいろ (岩手学ことはじめ ②)」, 『岩手日報』 6月6日号.
- 米地文夫 (1994b) 「教科書に載らなかった幻?の国タヌ・トゥーヴァ」 『季刊地理学』 46.
- 米地文夫 (1995) 「宮沢賢治の造語『羅須』と土壤名『ラス』ー自然地理的背景ならびに農民教育と
の関わりー」, 『岩手大学文化論叢』, 3.

このほか、無署名ないし匿名の文献として：

- C (1971) 「風と光」欄, 『賢治研究』昭和46年12月号.
- 無署名 (1992) 「宮沢賢治資料 ⑤/周辺資料」欄, 『宮沢賢治イーハトーブセンター会報』, 5.

付記 本稿脱稿後、次の文献の存在を知った。

- 牛山 恵 (1994) 「賢治童話における仮構された地名ー場を作る地名のレトリックー」, 『月刊国語
教育研究』, 267.

このなかで、牛山は「イーハトヴ」がコピー (宣伝文) として、岩手県の人に「郷土を舞台とする
童話を強調するため」書かれたとする点など、私と共通する考えもみられるが、やはり「イーハトヴ」
を岩手とし、岩手という「土地に執着しながらも、その地名を音韻の上でずらすことで」「実在の郷
土とは異質の異空間を現出させ」たとしており、私とは異なる見解にとどまっている。

なお、地名のレトリックについては箱石匡行教授に次の文献をご教示いただき、本稿のうち、特に
架空地名のもつ創造性に関する部分の記述に際して参考としたことを付記する。

- 明珍昭次 (1990) 「言語に憑かれた人間」, 明珍・箱石・平田共著『人間の情景』第四章。丘書房